

日本学校音楽教育実践学会 第31回全国大会

2026年8月22日（土）、23日（日）の二日間にわたって、J:COM ホルトホール大分にて、日本学校音楽教育実践学会第31回全国大会が開催され、全国各地から約130名の参加がありました。本学会は日々の学校音楽教育の理想とそのあり方を研究するとともに、新時代に対応した音楽授業の創造を積極的に行っています。全国大会では、それらの成果と課題について活発な議論が繰り広げられました。

セミナー「領域横断的な視点が切り拓く音楽教育の新たな世界

その4 ―音楽・数学・身体がひらく創造の学び― 中島さち子氏（音楽家、数学研究者、STEAM 研究者）



今回のセミナーでは、音楽・数学・身体がひらく創造の学びについて、大阪・関西万博テーマ事業プロデューサーとして「いのちの遊び場 クラゲ館」を手掛けられ、STEAM 教育者としても活躍される中島さち子氏を講師に迎え、小林武文氏、チェジェ Chol 氏と共に、講演・実演・ワークショップが行われました。最初の講演では、中島氏より音楽と数学、音楽とテクノロジーなど、様々な領域とクロスさせながら、音楽教育の可能性をひらいていく STEAM 教育について、実践事例を交えながら話されました。また、お題をもとにした中島氏、小林氏、チェ氏による即興演奏や、音楽と文化をクロスした打楽器によるコミュニケーションについて実演を交えながら話されました。そして、参加者が持ち寄った「音のなるもの」を使った「すちゃらか楽器」でのセッションが行われました。お互いの音を聞き、音と身体をとおしたコミュニケーションを体感し、動きと関わらせた音楽の面白さ、楽しさを味わうことができました。「遊び」から創造の学びは生まれる。だれもが創造する喜びを味わうことのできる学びとは何か。領域横断的に世界をみるとはどういうことかと、改めて問い直すことのできるセミナーでした。



課題研究「生成の原理に基づく音楽科授業における教科内容の体系

―その5 音楽科授業における教科内容の体系―

課題研究は今年度最終年度となりました。5年目の実践発表は、音楽科の教科内容の四側面「形式的側面」「内容的側面」「文化的側面」「技能的側面」の体系が見事に集約された発表でした。小学5年鑑賞《ハンガリー舞曲第5番》では、子どもたちはめまぐるしく変化する強弱や速度について身体やつぶやきを交えて知覚・感受しつつ、ロマの人々の音楽の生成過程にも思いを馳せ、子どもたち自ら四側面を関わらせて楽曲を味わう姿が印象的でした。中学2年創作《「さくらさくら」の前奏づくり》では「奏法を発明する！」と意気込んで箏の音色の探究をする中学生の姿がみられました。音楽の授業では、四側面いずれかに焦点を当てるのではなく、どの学年であってもすべての側面をかかわらせることで、音楽表現や鑑賞活動が能動的かつ豊かなものになることが実践を通して証明されました。



参加型教材実験プロジェクトⅠ 北海道支部・東北支部企画

「ヴィヴァルディの『夏』を題材にミュージッキングを楽しむ

—演奏・ダンス・紙芝居等々…流動的かつ増埒（るつぽ）的に—



北海道支部・東北支部の企画は、小ホールならではの環境にあわせて、参加者が移動可能なチームを作り、ヴィヴァルディの「夏」を題材にミュージッキングを楽しみました。スクリーンには、参加者の映像等が写し出されています。ヴァイオリンの旋律やピアノの音が鳴り響くなかで、うちわや新聞紙などでイメージを表す人、ペンライトを手にダンスをする人、ソネットをラップで叫ぶ人など、思い思いの行為で「夏」を表現していました。「ミュージッキング」という名の通り、音楽が行為であることを実感しながら増埒的な演奏が終わると、自主的に拍手が湧きおこりました。

すべての子どもを包摂する教育実践への可能性を感じるエネルギーな企画でした。

参加型教材実験プロジェクトⅡ 東京・関東支部企画

「『詩』を素材とした声による音楽表現

～つくり手と聴き手による『意図』の共有」



東京・関東支部企画では、オリジナルの「詩」を素材にして、「声」で表現する音楽づくりの模擬授業が実施されました。まず、オリジナルの詩が2篇配られ、小グループで詩を選び、次にその詩を素材に、工夫の手立てとなる音楽の要素を決めて音楽づくりを始めました。

最初は迷いながら真剣に考える表情が多くみられましたが、次第に様々な声や身体表現があちこちで生まれ、表したい詩のイ

メージにむかって、よりよい工夫を重ねて音楽表現を創り、探究を楽しむ表情に変化していきました。その後、2つの集団がペアを組み、互いの作品を聴きあい、質問や意見交換を通してつくり手と聴き手の意図を共有することで、主観的な意見と客観的な意見が往還し、表現への理解を深めることができました。最後に参加者全員でいくつかの表現とその意図を発表する時間が設けられました。多様なアプローチを通して教材としての可能性を見出すことのできる有意義な時間になりました。